



まつもと あやこ
松本農園 松本 綾子さん

長崎県島原市長貫町

取材日：H29.7.27



松本農園のしょうが畑にて

四代続くしょうが農家として、しょうがの販売促進や地域の発展の願いを含めた行動力が、地元の活性化に繋がっている取組みを紹介します。

◆プロフィール

【就農のきっかけ】

結婚を機に、平成6年に就農

【主な活動歴】

- ・長崎県男女共同参画推進員(H19～H26)
- ・島原市男女共同参画懇話会委員 (H19～現在)
- ・長崎県消費生活審議会委員 (H21～H23)
- ・長崎県環境審議会委員 (H26～H28)
- ・野菜ソムリエ プロ

【受賞歴】

- ・平成12年度フレッシュミズの主張全国大会 優秀賞
- ・平成23年度長崎県 J A 中央会
ご当地スイーツコンテスト 最優秀賞
- ・平成24年度島原市特産品新作展 最優秀賞
- ・平成25年度島原市特産品新作展 優秀賞

【その他】

- ・「島原市」ふるさと納税の返礼品
- ・農業女子プロジェクトメンバー

◆島原しょうがをもっと知って欲しい

結婚して間もなく授かった3人の子育てが一段落した頃、当時の島原しょうがの市場価値は、安価な輸入品の影響で低い市場価値となっており、また、しょうがの独特な流通制度のもと、安定的な取引ができない状況でした。しょうがの品質には自信があったので、独自の販売ルートを開拓するため、全国を駆け回り、少しずつ取引先が増えました。しょうがの販売先が増えてきたことで、栽培面積を増やし、今では2ヘクタールの圃場で栽培しています。

しょうがは、畑では機械で収穫できますが、ビニールハウス内では手掘りで収穫しています。大変ですが、マイルドな辛さで繊維質を感じない島原のしょうがの評価は高く、営業努力も相まって注文が増えてきたので、今度、栽培面積を増やしたいと考えていますが、近くの地区には遊休地や耕作放棄地が無いので、他の地区で探しているところです。

平成29年6月、島原しょうがの発展と経営強化のため、「株式会社 人作」として農業法人を立ち上げました。「人作」は我が家で最初に農業を始めたおじいちゃんの名前に由来しております。

◆加工品の開発について

平成23年に、JAご当地スイーツコンテストが開催されると聞き、しょうがの販売促進と三会地区の発展を願って開発したスイーツが、最優秀賞を獲得することができました。これをきっかけに、加工品の開発に意欲が出たため、自己資金で自宅横の倉庫の一角に加工場を設けました。これまでに開発した商品は、島原市の特産品新作展でも最優秀賞を受賞し、ふるさと納税の返礼品にも採用されています。

毎年、博多駅前で4月から10月の間、一か月に3日間開催される「博多ファーマーズマーケット」への出店を機に、某大手スーパーから九州一円の150店舗に出荷して欲しい、というお誘いの話がありました。残念ながら、今の現状では要望に応えられない状態で、まずは3店舗から販売することになりました。いずれは、加工場を拡大しようと考えています。



自慢のしょうが加工品の一部です。

松本農園について

じんさく

農業法人名称：株式会社 人作

従業員：3名（男性2名、女性1名）

農作物・経営規模：しょうが：2ha,

白菜：1ha, 大根1ha, ほうれん草：1ha,

にんじん：1ha, レタス：0.5ha,

とうもろこし：1ha, ごぼう0.2ha

○商品を掲載しているインターネットサイト

- ・「新鮮五感」
- ・「トノウ」
- ・「九州よかろうもん」・・・など

◆農業以外に取組んでいること

引きこもりの子どもや農業の楽しさを学びたいという子の受入れを行い、農作業を通して農業の楽しさ、一緒に収穫した農作物を食べることにより、生きる幸せを感じていただいています。中には、楽しさのあまり滞在期間を延ばした子もいます。農作業を通して土とふれあうことで、元気になって自宅に帰っていく姿に喜びを感じます。

◆農業経営の成果や苦勞について

全国各地にしょうがの営業に行ったり、加工場を作ったり、常にアンテナを張りめぐらせ、思いついたことはすぐに行動に移してきましたが、家族の反対にあったことは一度もありません。また、これまでに出会った人との出会いが、新しいことを始める上でさらに出会いを生んできました。そのため、楽しいことが多く、どんなに忙しいときも苦勞を感じたことはありません。

これからの女性農業者へのメッセージ

農業は、アイデア一つでどんな可能性も広がっていく職業です。大変な事もありますが、喜びを大にして楽しんで欲しいです。

「ほめる達人」検定、取得済です。「ほめ達」に興味がある方、調べてみて下さい。



今後の目標

3人の子供たちが、大学を卒業してから、営農・経営などを手伝ってくれる予定なので、農業や島原の良さを広めるために、農家レストランや体験型農業施設を造ることが目標です。また、雇用の拡大や、宿泊代の代わりに農作業を手伝ってもらうバックパッカー専用の宿を開くこと、農福連携の事業を考えています。